

音楽1レポート		日本の伝統音楽に親しもう		教科書 『高校生の音楽1』		P.102-103 日本の伝統音楽 P.106 能の音楽に親しもう P.142 日本における西洋音楽の展開	
提出日	月 日	氏名		得点		評価	

① 「日本の伝統音楽」(教P.102)を読んで、次の問いに答えよう。[知]

(各1点=2点)

1) 日本の伝統音楽についての説明として正しいものを次のなかから2つ選ぼう。

- ア 古代・中世・近世に生まれた音楽はほとんど伝承されていない。
- イ 各時代に生まれたさまざまな音楽が現在まで併存して伝えられている。
- ウ 楽器のみの音楽が圧倒的に多く、声を使うものはごく一部である。
- エ 声を使う音楽が圧倒的に多く、楽器のみのものはごく一部である。

2) 日本音楽の主な種目の成立時期を「古代」「中世」「近世」から選んで記入し、各種目の説明をそれぞれ選ぼう。

- ①雅楽 ②声明 ③平家 ④能楽 ⑤三曲 ⑥歌舞伎 ⑦文楽

- ア 地歌、箏曲、胡弓楽、尺八楽の総称で、江戸時代には主に盲人音楽家が演奏した。
- イ 仏教とともに伝わった単旋律の声楽で、仏教儀礼の際に僧侶によって唱えられる。
- ウ 音楽と舞踊が融合した演劇で、江戸時代には幕府の公式行事の際に演じられた。
- エ 平安時代に整理された儀式音楽で、宮中や寺社で用いられた。
- オ 義太夫節を伴奏音楽にした人形劇で、町人文化を背景に発展した。
- カ 『平家物語』を琵琶の伴奏で語る音楽で、琵琶法師によって演奏された。
- キ 演劇と舞踊、さまざまな音楽が一体となった歌舞劇で、町人を中心に流行した。

3) 次の空欄に記入して文章を完成させよう。

日本に多様な伝統音楽が併存している理由の一つとして、それぞれの音楽を享受する社会的グループが異なっていたことが挙げられる。近代になるまでは、雅楽は(ア)社会で、能楽は(イ)社会で伝えられ、歌舞伎や文楽は(ウ)の間で楽しまれていた。

日本の伝統音楽では、音を聴いて覚え、(エ)ことが重視され、(オ)の音を言葉に置き換えて唱える「(カ)」が活用されている。

(4点)

② 「呂中干の唱歌を覚えよう」(教P.106)を読んで、次の問いに答えよう。

1) 「呂中干」の読みをひらがなで書こう。[注/知]

2) 次の空欄に記入して文章を完成させよう。[知]

能の見せどころはシテの(ア)である。(ア)の音楽の多くは、(イ)によって繰り返される「(ウ)」という旋律を基本としている。呂中干は4つの短いフレーズからなり、曲や(エ)に合わせて(オ)を変えたり(カ)を加えたりしてさまざまな雰囲気表現し分けている。

(各2点=12点)

3) 呂中干の唱歌を聴いて覚え、次のフレーズを正しい順番に並べよう。[注/知]

- ア: ヲヒヤヒユイヒヨウリ
- イ: ヒウルイヒヨウリ
- ウ: ヲヒヤライホウホウヒ
- エ: ヲヒヤライヒウヤ



「呂中干」唱歌

(4点)

→   →   →
-----------

③ 《安宅》《高砂》《井筒》《羽衣》のあらすじ(教P.107)を読んで、次の問いに答えよう。

(各2点=12点)

1) 次の曲の内容として適切なものをそれぞれ選ぼう。[注/知]

- ①《安宅》 ②《高砂》 ③《井筒》 ④《羽衣》

- ア 松の木が老夫婦の姿となって現れ、二人の絆と天下の泰平を祝福する。
- イ 天人が「羽衣を返してほしい」と懇願し、美しい舞を舞う
- ウ 旅の僧の夢の中に、在原業平の面影を懐かしむ紀有常の娘が現れる。
- エ 弁慶が、主人である義経をわざと打って修羅場を切り抜ける。

2) 次の4曲の舞の音楽を聴いて、それぞれの呂中干の特徴を感じ取り、

あらすじと関連づけて、その違いを記入しよう。[注/思・判・表]

(各5点=20点)

《安宅》	《高砂》
《井筒》	《羽衣》

④ 「謡に挑戦しよう」(教P.106)を読んで、次の空欄に記入して文章を完成させよう。[知]

(各2点=12点)

能の物語は「(ア)」によって進行していく。(ア)は、せりふ部分の「(イ)」と旋律的部分の「(ウ)」に分けられる。後者には、息を強く出しながら力強く謡う「(エ)」と、旋律を重視して繊細に謡う「(オ)」という2つの発声法があり、(カ)や(キ)に応じて謡い分ける。

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	
カ	
キ	

(各1点=2点)

⑤ 「狂言の音楽」(教P.107)を読んで、正しいものを次のなかから2つ選ぼう。[知]

- ア 狂言は歌唱を中心とする演劇である。
- イ 狂言はせりふを中心とする演劇である。
- ウ 音や音楽が重要な役割を果たしている。
- エ 音や音楽は用いられない。

--	--